

共学教育と別学教育の比較によるライフスキル獲得に関する研究

スポーツマーケティングゼミナール 1315056 松川 怜奈

1. 研究動機・研究目的

近年、日本では少子高齢化や学校運営上の問題などから、女子校・男子校と呼ばれる別学教育の学校の数が大きく減少している(文部科学省, 2018)。一方、海外では別学教育での教育実践や研究結果が報告されている。National Association for Single Sex Public Education(2008), 【友野(2014)の引用による】によると、アメリカの公立小中学校 250 校で男女別学教育が実践されていることに触れたうえで、アメリカ、イギリス、オーストラリアの大規模な長期間にわたる共学・別学の実証的比較研究を実施し、別学の方が教育効果は高いという各国共通の結果を報告している。

教育に着目すると、ライフスキルは日本国内の 21 世紀における教育の基本目標である「生きる力」に極めて類似した概念として位置づけられていることを指摘されており、ライフスキルを生きる力を構成するスキルと捉えることができる(上野, 2001, 2008)。「生きる力」となるライフスキルが運動部所属の有無など、学校の教育環境と関連していることがいくつかの先行研究によって報告されている(上野・中込, 1998 ; 上野, 2001 ; 島本・石井, 2009 ; 平井ら, 2012 ; 島本ら, 2013)。

このライフスキルの習得や発達には、「生きた現実の関係が絶えず循環している学校生活や日常生活が関連しているとされている」(青木 2005)。

別学教育とライフスキルの関係に着目し、本研究は A 大学の学生を対象として、男女別学教育と共学教育といった教育環境とライフスキルとの関係を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

調査期間：2018 年 11 月 19 日～11 月 21 日

調査対象：A 大学の男女学生

調査内容：サンプルの個人的属性・ライフスキル尺度 17 項目(上野, 1998)・自己肯定感尺度 8 項目(梅山, 2012)・出身高校の男女比・出身高校の満足度・満足度の理由・共学、別学へのイメージに関する自由記述、

調査方法：質問紙調査を行い、直接配布・回収法(有効回答数 167 部)を行った。

分析方法：全体の傾向を把握するために単純集計を行った。ライフスキルに関する項目は個人スキル・対人スキルの 2 分類に分け、それぞれの合計得点を算出し、別学群と共学群の間で t 検定を行った。すべてのデータ分析には統計パッケージである IBM 社の統計解析ソフト「SPSS Statistics 21」を用いた。

3. 主な結果と考察

(1) 個人スキル、対人スキルの共学出身者、別学出身者の比較

個人スキル、対人スキルの得点において共学・別学出身者で比較すると、個人スキルは 5 %

水準で、対人スキルは1%水準で統計的に有意な差が認められた。平均値の差は個人スキルは3.7点、対人スキルは3.9点となり、どちらも共学出身者より別学出身者が高い平均値を示し、別学出身者の方が個人スキル・対人スキルともに獲得している程度が高い傾向が見られた。別学教育での教育環境が、例えば、「異性のいない環境で目標に集中することができる」といった環境などが、ライフスキルの獲得に何らかの影響を与えているのではないかと考えられる。

表1. 共学出身者・別学出身者別に見た個人スキル・対人スキル得点の平均比較

項目	全体		共学		別学		t値	P
	平均値	S. D.	平均値	S. D.	平均値	S. D.		
個人スキル	32.2	9.4	31.5	9.7	35.2	7.7	-2.019	*
対人スキル	46.0	7.3	45.3	7.4	49.2	6.2	-2.730	**

*p<.05,**p<.01,***p<.001

(2) ライフスキルの学年別比較

高校をまだ卒業したばかりの大学1年生と大学2年生以上でライフスキルの平均値比較を行った。個人スキルと対人スキルに関して、個人スキルは1%で統計的に有意な差が認められ、対人スキルは有意差が認められなかった。個人スキルの平均値の差は4.7点となり、大学1年の平均値は高いという結果が得られた。個人スキルに有意差が認められたことから、同じ環境下でも、年代の違いによってライフスキル獲得は変わってくると考えられる。また、別学教育から共学教育に移行してからの年数の違いや、まだ大学に入学したばかりの1年生の方が、フレッシュで自主性が強くなり、2年生以上は大学生活に消極的になっていることから個人スキル獲得に影響しているのではないかと推察される(全国大学生活協同組合連合会, 2015)。

4. 結論

先行研究では別学の方が教育効果が高いという各国共通の結果が報告されており、その結果を示すように本研究でもライフスキルにおいて別学の方が高いという傾向が見られた。

今回、別学教育のライフスキル獲得に別学教育の方が高い傾向が見られたが、もう少し別学教育の研究や知見を積み重ねていく必要があるのではないかと考える。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文にあたり、なかなか思うようにいかないこともあり苦労もありました。しかし、学生最後の集大成として卒業論文を完成させることができ、達成感を感じることができました。本論文を作成するにあたり、最後まで沢山のご指導いただきました指導教官である工藤康宏先生には心より感謝申し上げます。最後に、楽しい時やどんなに追い込まれ、つらい時も支えてくれゼミ員。多くの時間を過ごしたゼミ員に感謝したいです。本当にありがとうございました。

主な引用参考文献

- ・青木邦男(2005) 高校運動部員の社会的スキルとそれに関する要因 <http://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/5/File/kiyo503.pdf> (参照日: 2018/11/20)
- ・上野耕平・中込四郎(1998) 運動部動参による生徒のライフスキル獲得に関する研究 体育学研究 33-42